



TITLE:

遊牧國家とオアシス國家の共生關係--西突厥と麴氏高昌國のケースから

AUTHOR(S):

荒川, 正晴

CITATION:

荒川, 正晴. 遊牧國家とオアシス國家の共生關係--西突厥と麴氏高昌國のケースから. 東洋史研究 2008, 67(2): 194-228

ISSUE DATE:

2008-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/147175>

RIGHT:

遊牧國家とオアシス國家の共生關係

——西突厥と麴氏高昌國のケースから——

荒 川 正 晴

はじめに

第一節 西突厥の使節と麴氏高昌國

(一) 西突厥の使節に關わる文書史料

(二) 文書の年代と使節の比定

(三) 遊牧諸集團による使節派遣の常態化

第二節 ソグド人の派遣と交易

(一) 使節とソグド人

(二) 大官とソグド人

(三) 使節と交易活動

第三節 國家の事業としての使節の應接

結 び

は じ め に

中央アジア⁽¹⁾には、草原と沙漠というその自然環境に適應して生活する遊牧民とオアシス民が存在し、兩者は共生しながらその歴史を育んできた。したがって中央アジア社會の特質を追究するには、まずはこうした兩者間に結ばれる共生關係

の諸相を具體的に明らかにしてゆくことが求められよう。もちろんこれまでも彼らの共生關係について、軍事的優位に立つ遊牧民と富を集積するオアシス民との相利的な關係がしばしば指摘されてきた⁽²⁾。しかしながら、中央アジアにおける遊牧民とオアシス民との共生とは具體的に何を指すのか、必ずしも實證的な検討が加えられたわけではなく、具體的なその姿についてはよくわからない點が多い。とくに留意しなければならないのは、オアシス民に視點を据えて見れば、共生相手となる遊牧民といっても、それには日常的に接する身近な遊牧集團のレベルから、廣域に支配を及ぼす遊牧國家のレベルまで様々にあり一枚岩ではないことである。またオアシス民にしても同様に、遊牧民の共生對象となるオアシスには、集落レベルの小規模なオアシスから、「王」のもとに政治組織が整備されたオアシス國家のレベルまであり、決して一様ではない。國家レベルでの兩者の關係で言えば、強大な遊牧國家がステップ地域に成立すると、その君主はオアシス國家の「王」を政治的に統屬し、遊牧國家の一員としてオアシス國家を組み入れている。

本論では、兩者間の多様な共生關係を説明してゆく一つのステップとして、史料がある程度確保できる西突厥とトゥルファンのオアシス國家である麴氏高昌國との共生關係を具體的に取り上げ、まずは國家レベルでの兩者の共生關係について検討してみたい⁽⁴⁾。なお以下、本論で中央アジアと言う場合、とくに斷らない限り、基本的にパミール以東のそれを指すものとする。

第一節 西突厥の使節と麴氏高昌國

遊牧民が廣域にわたる支配を及ぼす遊牧國家を建てると、遊牧部族だけでなくオアシス民が建てるオアシス國家をも、その國家體制のなかに取り込んでいったことは既に述べたとおりである。本論で検討對象とする中央アジア地域では、唐が貞觀四（六三〇）年に伊吾^{ハミ}を併合して中央アジアへ乗り出してくる以前、一時的な斷絶はありながらも、いわゆる西突厥が勢威を振るい、パミール以東ばかりでなく以西にもおよんでオアシス國家を支配下に置いていた。すなわち、六世紀半ばに勃興した突厥は、五八三年に東西に分裂しながらも、その西方勢力である西突厥が先ずはウルドゥスに王庭を置い

てパミール以東のオアシス諸國を支配下においた。その後、七世紀初頭の隋の大業年間には、鐵勒の擡頭によりジュンガル地域と南のオアシス諸國の一部が離反したが、それを再び回復した統葉護可汗の時期には、王庭を碎葉（天山西部北麓の現在のトクマク附近、スイアーブ遺址）に遷し、タリム盆地周邊ばかりでなくパミール以西のオアシス諸國をも廣くその支配下に組み込んだのである。パミール東西にわたるほぼすべてのオアシス諸國は、西突厥の國家體制の中に組み入れられたと言えよう。『舊唐書』卷一九四下 突厥傳下（中華書局標點本〈以下略〉、五一八一頁）には、こうした統葉護可汗時代の状況を、以下のように傳えている。

統葉護可汗は、勇にして謀有り。攻戰を善くし、遂に北は鐵勒を并せ、西は波斯を拒ぎ、南は罽賓に接すれば、悉く之に歸す。控弦は數十萬、西域を霸有す。舊の烏孫の地に據るに、又た庭を石國北の千泉に移す。其れ西域諸國の王は悉く頡利發を授けらる。并せて吐屯一人を遣わして之を監統し、其の征賦を督せしむ。西戎の盛なること、未だ之れ有らざるなり。

この史料から、統葉護可汗が、配下のオアシス諸國の「王」すべてに、遊牧部族長と同様に「頡利發 itäbär」の稱號を授與し、併せてこれらオアシス諸國に監察と徵税を擔當する「吐屯 tudun」を派遣していたことができる⁽⁵⁾。この體制は、統葉護可汗時代になってはじめて形成されたわけではなく、西突厥の基本となる支配體制であつた⁽⁶⁾。つまり itäbär の稱號の授受を通じて、遊牧國家の可汗とオアシス國「王」との間に政治的支配—從屬關係が形成されていたことが知られる。先の『舊唐書』の記事にも見えているように、この政治的統屬關係に基づいて、オアシス國「王」には可汗に対して「征賦」（賦税）の納入が課せられていた。こうした「征賦」物は、基本的に毎年、可汗のもとに送られたと考えられ、事實『魏書』卷一〇二西域傳、疏勒國の條（二二六八頁）には「土は稻・粟・麻・麥・銅・鐵・錫・雌黃・錦・綿、

多し。毎歲、常に突厥に供送す。」と見え、^{カシユガ}疏勒國家では毎年、穀物・礦物資源とともに錦や真綿を西突厥へ送っていた。おそらくは各オアシス國家の様々な産品が「征賦」物として徴收され、それを「供送」するためにオアシス國家から可汗のもとに使節が派遣されていたと見られる。しかしながら、こうした義務は同時に遊牧國家に對するある種の權利を派生させるものであった。その結果、遊牧國家とオアシス國家の間に一定の共生關係が構築されていたと見られるのである。

そしてこの兩者の共生關係として常々指摘されてきたのが、軍事的優位に立つ遊牧民（國家）と富を集積するオアシス民（國家）との相利的な關係であつた。つまり、オアシス國家は遊牧國家の收奪の對象となる替わりに、遊牧國家の軍事的な庇護（オアシス國家の防衛やキャラヴァン隊の警護など）に與るといふ關係である。しかしながら、この見方だけでは兩者の共生關係を十分にすくい取ることはできない。とくに強大な遊牧國家が成立した時、國家レベルでの相利的な關係の中核となつたものは何であつたのか、掘りさげて捉える必要がある。以下にそれを具體的に考察してみよう。

（一）西突厥の使節に關わる文書史料

トゥルファン文書を通覽すると、麹氏高昌國が西突厥などからの外來使節を受け入れ、それらを接待していたことを傳える史料が數多く存在することに氣附く。具體的に掲げれば、以下の通りである。

① 「高昌衆保等傳供糧食帳」

（69TKM33:1/2(a), 1/7(a), 1/10(a), 1/6(a), 1/3(a)）〈錄〉『文書』一、二八三—二八七頁。〈寫〉『圖文』一、一三三—一四〇頁。）

② 「高昌奇乃等粗細糧用帳」

（69TKM33:1/8(a), 1/9(a)）〈錄〉『文書』二、二九四—二九五頁。〈寫〉『圖文』一、二四三頁。）

③ 「高昌重光三（三三）年條列虎牙汜某等傳供食帳二」

（66TAM50:90b）〈錄〉『文書』三、一七〇—一七一頁。〈寫〉『圖文』一、三三七頁。）

- ④ 「高昌傳供酒食帳」(72TAM154:26 〈錄〉『文書』三、一四六頁。〈寫〉『圖文』一、三六八頁。)
- ⑤ 「高昌竺佛圖等傳供食帳」
(60TAM307:5/3(a), 5/2(a), 5/4, 5/5(a) 〈錄〉『文書』三、一五〇—一五四頁。〈寫〉『圖文』一、四二—四一四頁。)
- ⑥ 「高昌虎牙都子等傳供食帳」(60TAM307:4/2(a) 〈錄〉『文書』三、二五五頁。〈寫〉『圖文』一、四一四頁。)
- ⑦ 「高昌□善等傳供食帳」
(60TAM307:5/1(a), 4/4(a), 4/3(a) 〈錄〉『文書』三、二五六—二五九頁。〈寫〉『圖文』一、四一五—四一七頁。)
- ⑧ 「高昌令狐等傳供食帳」⁽⁷⁾
(60TAM307:5/2(b) 〈錄〉『文書』三、二六〇—二六一頁。〈寫〉『圖文』一、四一八頁。)
- ⑨ 「高昌虎牙无治等傳供食帳」
(60TAM329:23/1, 23/2, 23/3, 23/4 〈錄〉『文書』三、三四—三四五頁。〈寫〉『圖文』一、四六一頁。)
- ⑩ 「高昌都子等傳供食帳」
(73TAM517:04/8-4, 04/8-3, 04/10(a) 〈錄〉『文書』四、補二四—二六頁。〈寫〉『圖文』一、二六三頁。)
- ⑪ 「高昌曹石子等傳供食帳」
(73TAM517:04/8-1, 04/7(a) 〈錄〉『文書』四、補二七—二八頁。〈寫〉『圖文』一、二六三—二六四頁。)
- ⑫ 「高昌元禮等傳供食帳」
(73TAM517:04/1(a), 04/8-2(a), 04/2(a), 04/3(a), 04/9(a), 04/5, 04/6(a), 04/4 〈錄〉『文書』四、補二九—三四頁。〈寫〉『圖文』一、二六四頁。)
- ⑬ 「高昌崇保等傳寺院使人供奉客使文書」
(69TAM122:3/2, 3/6 〈錄〉『文書』三、三三八—三三九頁。〈寫〉『圖文』一、四五五頁。)

⑭「高昌延壽十四（六三七）年兵部差人看客館客使文書」

（72TAM171:12(a), 17(a), 15(a), 16(a), 13(a), 14(a), 10(a), 18(a) 〈録〉『文書』四、一三一一三五頁。〈寫〉『圖文』二、七六一七八頁。）

以上に掲げた文書は、アスターナ古墳群の五〇號（③）・一五四號（④）・三〇七號（⑤～⑧）・三二九號（⑨）・五一七號（⑩～⑫）・一二二號（⑬）・一七一號（⑭）およびカラホージャ古墳群の三三號（①②）の八墳墓から出土したものである。このうち大半を占める③・④を除く①～⑫は、魏氏高昌國の一定期間内における穀物の公的支出を、支出ごとに逐一連記するかたちで集計した帳簿様の公文書（以下、「供糧食帳」と略稱）である。そしてこの「供糧食帳」のうち⑤～⑨の文書は、ほとんどの穀物支出が遊牧國家から魏氏高昌國へ遣わされた使節に對するものとなっており、供給先を限定して穀物の支出状況をまとめた如くである。

なお③・④は、書式は①・②および⑩～⑫と基本的に同一であるが、これは穀物のほかにも酒・肉・油・棗・餅など様々な食料品の支出帳簿となっていた。③は、ほとんどの支出先は國內の官・兵・僧・民であるが、その中に混じって「客胡」が見えており、また④には、魏氏高昌國の官員とともに遊牧勢力からの使いが酒・麵・麴・粟米・棗等を受給していたことが記録されている。

他方、こうした食料支出簿に對して、⑬・⑭はともに使節を接待する役務を課された人の供出を内容としている。⑬は六〇三～六〇四年の作成と推定される帳簿様の公文書であり、遊牧勢力からの使節の接待に供出された寺院の隷屬民が使節ごとにまとめられている。また⑭は魏文泰統治下、延壽十四（六三七）年七月三十日に尙書系の兵部が作成した帳簿様の公文書であり、遊牧使節の接待の場となった客館への勞役供出に關する内容となっている。

個々の文書に關する先行研究やそれを踏まえた検討は、本論では一切割愛せざるを得ないが、本論のテーマにとってこれらの史料は重要な意味を有しているので、敢えてここでこれらを取り上げたい。まずはこれらの文書から具體的な使節

を拾い上げてゆくと、表1に列挙したようなものが認められる。

(二) 文書の年代と使節の比定

表1「魏氏高昌國使節・客人一覽表」の「遊牧諸集團の使節」表（以下、「遊牧使節表」と略稱）に見える諸使節について、王素氏と姜伯勤氏は、珂寒 *qayan* からの使節に關して、次のように比定している。すなわち、阿博珂寒（No. 1・2、⑤・⑦文書）は阿波可汗 *Apa qayan* に、⁽¹⁰⁾ 貪渾珂寒（No. 3—5、⑦・⑧・⑩文書）は『隋書』卷八四突厥傳に見える貪汗可汗に、⁽¹¹⁾ 尼利珂蜜（No. 10、⑬文書）は泥利可汗（阿波可汗の後、在位五八七—六〇三・六〇四）に、⁽¹²⁾ また怒邏珂寒（No. 11、⑨文書）は處羅可汗（泥利の子、在位六〇四—六二一）にそれぞれ當てている。⁽¹³⁾ この比定は、その他の研究者たちも追認しており、私もこれに従いたい。

以上の可汗の比定を前提に考えると、⑤・⑦・⑧・⑩の文書の作成時期は、阿波可汗と貪汗可汗の在位期間から五八三—五八七年に限定される。⁽¹⁴⁾ すなわち五八三年といえ、突厥では阿波可汗（大邏便）や貪汗可汗が、西面可汗であつた達頭可汗に走り、事實上、突厥が東西に分裂した時期にあたり、五八七年とは阿波可汗が葉護可汗（莫何可汗、處羅侯）により生け捕りにされた時期にあたる。これに對して處羅可汗の名が見える⑨は、彼の可汗在位期間である六〇四—六二一年に作成されたことになるが、さらに年代を狭めて六〇四—六〇五年に比定する説が提出されている。⁽¹⁵⁾ これは⑨には處羅可汗とともに「卑失地婆護」が見えており、これが泥利可汗の弟である波實特勤に比定できることによる。また泥利可汗の名が見える⑬は、彼の可汗在位期間である五八七—六〇三・六〇四年に作成されたことになるが、ここにも「卑失地婆護」が見えており、このことから⑬は六〇三—六〇四年に作成されたことが指摘されている。⁽¹⁶⁾ 何れの見解も一定の説得力をもつ。

このほか⑥・⑦文書に見える南廂珂寒については、阿波可汗の五八三—五八七年に西突厥本土で設けられていた南廂小可汗に比定され、さらに⑨文書に見える北廂珂寒については、處羅可汗治世下の北廂小可汗とする見方が既に提出されている。⁽¹⁷⁾ ⑦および⑨の文書年代からも、妥當な見解であらう。

表1 「魏氏高昌國使節・客人一覽表」

游牧諸集團の使節^⑮

	使節派遣主	所遣使者	時代	出典
	[qayan]			
1	阿博珂寒Apa qayan	□振珂離振	583～587	⑤の5/4; 『圖文』1, p. 414
2	阿博珂寒Apa qayan	鐵師の居 [織] 'kwcyk ^⑮	583～587	⑦; 『圖文』1, p. 415
3	貪泮珂寒-qayan		583～587	⑦; 『圖文』1, p. 417; ⑩; 『圖文』1, p. 263
4	貪泮珂寒-qayan	金師の莫畔陁m'x βntk ^⑮	583～587	⑧; 『圖文』1, p. 418
5	貪泮珂寒-qayan	孤艮貪泮	583～587	⑩; 『圖文』1, p. 263
6	南廂珂寒-qayan	咄舉貪泮	583～587	⑥; 『圖文』1, p. 414ほか
7	南廂珂寒-qayan	子弟	583～587	⑦の4/3(a); 『圖文』1, p. 417ほか
8	[珂] 寒-qayan	呼典枯合振xwt'yn- ^⑮	583～587	⑦の5/1(a); 『圖文』1, p. 415
9	[] 珂寒-qayan	陁鉢大官tatpar tarqan子弟	583～587	⑦の5/1(a); 『圖文』1, p. 415
10	尼利珂蜜<寒>-qayan		603～604	⑬; 『圖文』1, p. 455
11	忽邏珂寒-qayan	烏都倫大官-tarqan	604～605	⑨; 『圖文』1, p. 461
12	北廂珂寒-qayan	吐別貪早	604～605	⑨; 『圖文』1, p. 461
13	[] 珂寒-qayan	吐屯[]tudun-	604～605	⑨; 『圖文』1, p. 461
14	珂寒-qayan	荀公主-qunčuy・提懃・大官	637	⑭; 『圖文』2, pp. 76-78
	[qatun]			
15	延堅珂頓-qatun		587年前後	①の1/7(a), 1/10(a); 『圖文』1, p. 239
16	渾珂頓-qatun		587年前後	①の1/7(a), 1/10(a); 『圖文』1, p. 239
	[tegin]			
17	貪泮提懃-tegin		583～587	⑤の5/4; 『圖文』1, p. 414
18	提懃tegin烏羅渾		583～587	⑤の5/2(a); 『圖文』1, p. 413
19	提懃tegin珂都虔		583～587	⑦の5/1(a); 『圖文』1, p. 415
20	提懃tegin婆演	烏練那	587年前後	①の1/6(a), 1/3(a); 『圖文』1, p. 240
21	提懃tegin婆演	衛畔陁-βntk	587年前後	①の1/6(a), 1/3(a); 『圖文』1, p. 240
	[yabyu]			
22	卑失蚩婆護-yabyu ^⑮		603～604	⑬; 『圖文』1, p. 455
23	卑失移浮孤-yabyu	烏庾延-y'n・伊利 []	604～605	⑨; 『圖文』1, p. 461
24	移浮孤yabyu	門頭	587年前後	②; 『圖文』1, p. 243
	[šad]			
25	依提具拙itig? šad	那 []	583～587	①②04/8-1; 04/1(a); 『圖文』1, pp. 263-264
26	移桑拙is? šad	浮 []	583～587	⑦の5/1(a); 『圖文』1, p. 415
27	符離拙böri šad	肥還大官-tarqan	637	⑭; 『圖文』2, p. 78
28	寧受□符離拙böri šad	阿利摩珂大官-maxa tarqan	637	⑭; 『圖文』2, p. 78
29	居偁拙-šad		637	⑭; 『圖文』2, p. 78

	[tarqan]			
30	棧頭大官-tarqan ^㉓	炎畔陀 y'm Bntk ^㉔	583～587	⑤の5/4; 『圖文』 1, p. 414
31	棧頭大官-tarqan	脾婆pysk ^㉕	583～587	⑤の5/4; 『圖文』 1, p. 414
32	棧頭□□大官-tarqan		583～587	⑤の5/2(a); 『圖文』 1, p. 413
	[tudun]			
33	棧頭吐屯-tudun		583～587	⑫の04/1(a); 『圖文』 1, p. 264
	[irkin]			
34	阿都紇 ^㉖ 希瑾-irkin	畔陀Bntk, 子弟	583～587	⑥; 『圖文』 1, p. 414
35	希瑾irkin	摩 []	583～587	⑧; 『圖文』 1, p. 418
	[その他]			
36	好延枯騰振摩珂賴	金穆烏紇大官-tarqan	637	⑭; 『圖文』 2, p. 78
37	烏渾摩何先	何干	583～587	⑤の5/3(a); 『圖文』 1, p. 412
38		珂摩至大官-tarqan	603～604	⑬の3/6; 『圖文』 1, p. 455
39		无賀大官-tarqan	ca.621	④; 『圖文』 1, p. 368
40		時遲大官-tarqan	ca.621	④; 『圖文』 1, p. 368
41		移早大官-tarqan	ca.621	④; 『圖文』 1, p. 368
42		□□大官-tarqan	ca.621	④; 『圖文』 1, p. 368
43		[] 慶大官-tarqan	604～605	④; 『圖文』 1, p. 461
44		吐屯大官-tudun tarqan別 []	604～605	⑨; 『圖文』 1, p. 461
45		婆演大官-tarqan別迦	604～605	⑨; 『圖文』 1, p. 461
46		棧頭折无良	583～587	⑦の4/4(a); 『圖文』 1, p. 416
47		棧頭案豆遮摩何先	583～587	⑤の5/2(a); 『圖文』 1, p. 413
48		棧頭摩珂 []	583～587	⑦の4/3(a); 『圖文』 1, p. 417
49		棧頭浮 []	583～587	⑦の4/3(a); 『圖文』 1, p. 417
50		婆瓠 ^㉗ 吐屯boqu tudun牛兒渾	583～587	⑤の5/3(a); 『圖文』 1, p. 413
51		婆瓠boqu孤時 []	583～587	⑤の5/5(a); 『圖文』 1, p. 414
52		鷄弊零 ^㉘ 蘇利結个婦	583～587	⑤の5/3(a); 『圖文』 1, p. 413
53		鷄弊零	583～587	⑦の4/4(a); 『圖文』 1, p. 416
54		烏莫胡 []	583～587	⑦の4/3(a); 『圖文』 1, p. 417

◆「中國」の客人◆オアシス國家の使節・客人

	客人	時代	出典
1	漢客, 張小惠	637	⑭; 『圖文』 2, p. 77

	使節派遣主	所遣使者・客人	時代	出典
1	何國王兒	奚 []	587年前後	①の1/2(a); 『圖文』 1, p. 238
2	璽吳 ²⁹ (伊吾)吐屯 tudun 吐屯拙tudun šad	由旦	583年前後 604～605	①の1/2(a); 『圖文』 1, p. 238 ⑨; 『圖文』 1, p. 461
3	焉耆國	射卑 ⁽³⁰⁾ 婦兒	637	⑭; 『圖文』 2, pp. 77-78
4		客胡	ca.622	③; 『圖文』 1, p. 377

表2 「麴氏高昌國の使節應接頻度表」

	某月下半期(584-587年)	翌月上半期(同左)	翌月下半期(同左)
1	貪渾珂寒-qayan／某	[] 珂寒-qayan／兜舉貪渾	阿博珂寒Apa qayan／鐵師居織'kwcyk
2	南箱珂寒-qayan／ [] 子弟(3人)	南箱珂寒-qayan／[] 子弟(3人)	阿博珂寒／□振師離振(2人)
3	貪渾提慙-tegin／某	某／[] 渾子弟(2人)	南箱珂寒-qayan／[] 子弟(6人)
4	提慙tegin烏羅渾(53人)	提慙tegin烏羅渾(51人)	南箱珂寒／兜舉貪渾
5	[] 摩珂 []	婆瓠吐屯boqu tudun牛兒渾(5人)	[] 珂寒／陀鉢大官tatpar tar-qan子弟(10人)
6	烏莫胡 []	鷄弊零蘇利結个の婦(6人)	[] 珂寒／呼典xwt'yn枯合振 []
7	棧頭摩珂 [] (14人)	棧頭□□大官tarqan／某(18人)	外生兒の提慙tegin珂都虔(45人)
8	棧頭 []	棧頭案豆遮摩訶先	貪渾提慙-tegin／某
9	棧頭浮 []	烏渾摩何先／何干(3人)	移桑拙is? šad／浮 [] (8?人)
10		[] 思紇(2人)	棧頭大官 tarqan／炎畔阡 y'm Bntk(7人)
11		某 (14人)	棧頭大官／脾婆pysk(4人)
12		某	棧頭大官／某
13		某	棧頭大官／某
14			棧頭折无昆(2人)
15			[] 先(6人)
16			[] 阡(20人)
17			鷄弊零
18			渾容居之弊 [] (2人)
19			某／兜舉貪渾(2人)
20			某

(注) ／を境にして、左は使節派遣主を、右は遣わされた使者(使節の代表者)を記す。なお／が無いものは、文書の缺損によりその區別を判断できなかったこと、もしくは両者が重なっていた可能性があることを表している。また() の人数は使節随行人の数を示す。

これらのことから、「游牧使節表」に見える使節は、六二一年（推定）・六三七年時點の使節も含まれながらも、多くは五八三―五八七年と六〇三―六〇五年に派遣されたそれに集中する傾向にあることが知られる。ただしこの期間だけに使節が集中する政治的な要因はとくに見あたらず、この偏りは當時に作成された文書の一部だけが今に残る、その偶発的な事情そのものに起因しているよう。このことから、これらの文書にもとづき魏氏高昌國における西突厥の使節應接の概況をうかがうことは許されよう。このことを前提としたうえで、この一覽表を通覽して何よりも注目されるのは、游牧勢力より遣わされた使節といつても、可汗が派遣する使節以外の使いが数多く含まれていることである。すなわち同表から、魏氏高昌國に使節を派遣したものととして、大可汗を筆頭に、その妻である可敦（公主）や小可汗、さらには提慙・太官・希瑾・移浮孤（地婆護）・拙などがあつたことが知られる。提慙をはじめ太官・希瑾・移浮孤（地婆護）・拙は、それぞれトルコ語の *tegin-targan-irkin-yabyu-šad* に比定できる⁽³¹⁾。このことは、高昌國で接待される游牧國家の使節といつても、それは「國書」を發出できる大可汗の使節だけでなく、そこには實に様々な勢力（以下、游牧諸集團と稱す）からの使節があつたことを明示している。

また先に述べた *šad-yabyu-irkin* は、それぞれの領地・領民を支配する游牧集團であるが、それらが使節を派遣するのに、逐一、大可汗に「國書」を求めていたとは考えられない。また可汗の近くにいたと見られる *gatum* や *targan*、さらには *tegin* の使節においても、後に検討するようにそれらの使節派遣が常態化していたことから見て、大可汗の「國書」を有していなかった可能性は高い。すなわち、大可汗の「國書」をもたない使節が、大可汗のお膝元からも、自ら領地・領民を有する *yabyu-šad-irkin* などの游牧諸集團からも数多く派遣されていたのである。そして前掲文書を見る限り、魏氏高昌國ではそれらをすべて國家が受け入れるべき使節として應接していた。

(三) 遊牧諸集團による使節派遣の常態化

ところで先に掲げた文書のうち、阿波可汗の名が見える⑤と⑦は、吳玉貴氏が明確にしたように、連続した一ヶ月半にわたる「供糧食帳」となっている⁽³³⁾。

先の推定に基づけば、この⑤と⑦は五八三―五八七年のある時点における一ヶ月半の穀物支出記録ということになる。

さらに阿波可汗は達頭可汗が隋へ降附すると(五八四年)⁽³⁴⁾、彼に替わって西突厥の大可汗位を得、「龜茲・鐵勒・伊吾および西域の諸胡」をことごとく支配下に収めたとされるので、本文書は五八四年以降である可能性が高い。魏氏高昌國では、第六代王である麴乾固(在位、延昌元(五六二)年―四十一(六〇二)年)の時代に⁽³⁵⁾あたると推定される⁽³⁶⁾。

これらの文書から、魏氏高昌國が一ヶ月半の間にどれほどの遊牧諸使節を受け入れていたのか、その全容をうかがうことができる。それによれば、これらの使節の滞在期間は二日から一ヶ月前後におよぶまで多様であるものの、その使節の数が一ヶ月半に全體で四〇件餘りにのぼっていることがわかる。ここで使節の派遣主體と遣わされた使者(使節の代表者)の名および使節隨行人の規模を分かる限り舉げてみれば、表2の通りである。

例えば、この表からは短期間ながらも、可汗のもとから遣わされたと見られる多様な使節が読みとれる。「翌月下旬」に限ってみても、大可汗である阿博珂寒の使いとして、明白なものだけでも「鐵師の居織」「□振珂離振」の二グループが認められる。このほか阿博珂寒か小可汗である南箱珂寒のどちらか確定はできないものの、可汗の使節として別に「陀鉢大官子弟」「呼典枯合振」「」の二グループが見えている。さらに南箱珂寒の使節として明白なものとしても、「「子弟」と「啣舉貪澤」が同時期に派遣されている。つまり大・小可汗あわせて半月の間に、都合六グループが魏氏高昌國に滞在していたことになる。このうち小可汗の南箱珂寒がどこに據點を置いていたのかは詳らかではないが、大可汗であった阿博珂寒は、大ユルドウス河谷にその牙庭を置いていたことが推測されている⁽³⁷⁾。さらには、Tegin-targan-šad

などからの諸使節も、同時期に数多く派遣されていた。

吳玉貴氏は、前掲「供糧食帳」を踏まえ、遊牧國家からトゥルファンへ派遣された使節が、年間を通して最低でも三七二件、隨行人あわせて四、八三六人の数におよぶものであったことを推算している⁽³⁸⁾。この數字は魏氏高昌國の總人口の八分の一強を占める規模となる。言うまでもなく、この試算は今後の檢證にまところが大いだが、少なくとも往來する使節が相當な數にのぼり、魏氏高昌國でのその受け入れと應接が常態化していたことは、ここに示した一覽表からでも十分にうかがえよう。

このように大可汗あるいは小可汗ばかりでなく、*qatun-tegin-targan* や、自らの領地・領民を有する *sad-yab/urkin* らが、西突厥の身分稱號ないし官稱號を帯びるそれぞれの立場から、常時、魏氏高昌國への使節を自主的に派遣していたのである。

第二節 ソグド人の派遣と交易

(一) 使節とソグド人

前掲表1「遊牧使節表」を通覽して注目されるのは、多様な遊牧諸集團より派遣されてくる使節の代表として、ソグド人が少なからず使われていることである。たとえば同表No.2には阿博珂寒 *Apa qayan* の使節として鐵師の居織が掲げられているが、使者の居織という名は、ソグド語で「クチャの(人)」を意味する *kwcyk* を漢字音寫したものである⁽³⁹⁾。つまり阿博可汗の使節として、ソグド人の鐵師が高昌國で迎入れられ、供應を受けていた。ここに言う鐵師については、鍛造鐵器の制作に關わる工匠と解されており、⁽⁴⁰⁾ここでもその見解に従っておく。

さらに「遊牧使節表」No.4には、貪渾珂寒の使いとして金師の莫畔陀の名が掲げられている⁽⁴¹⁾。莫畔陀も、ソグド語で

「月の神の奴僕」を意味する *m:x bñk* であり、⁽⁴²⁾ これも貪澤可汗の使者として、ソグド人の金師が高昌國で接待されていたことになる。金師も金銀器の制作に關わる工匠とみることができよう。⁽⁴³⁾ こうしたソグド人技術者が可汗の使節として派遣されていたのである。

このほかにも、可汗の使節として、同表 No. 8 には呼典枯合振が見えているが、冒頭の呼典はソグド語 *xwīyn* の漢字音寫であつた可能性は高い。⁽⁴⁴⁾

他方、こうした可汗の使節だけでなく、「遊牧使節表」には提勲 *tegn* の使節として衛畔陀 *bñk* (同表 No. 21)、移浮孤 *yabyu* の使節として烏庚延 *-yn* (同表 No. 23)、俟斤の使節として畔陀 *bñk* (同表 No. 34)、大官 *tangan* の使節として炎畔陀 *ym bñk* (同表 No. 30⁽⁴⁵⁾) と脾娑 *pysk* (同表 No. 31⁽⁴⁶⁾) の名がそれぞれに見えている。これらもその名からソグド人であつたことは明らかで、多様な遊牧諸集團からの使節にソグド人が深く關與していたことがうかがえる。

實は表 1 「遊牧使節表」には當然のことながら「孤良貪澤」などのテュルク遊牧民風の名が擧げられているが、六・七世紀初にソグド人がそうしたテュルク遊牧民風の名を既に名乗っていたことは、魏氏高昌國時代の「(c. 七世紀初) 昭武九姓胡人曹莫門陀等名籍」(66TAM3:14 〈錄〉『文書』三、一一九—一二〇頁。〈寫〉『圖文』一、三三九頁。⁽⁴⁷⁾) や「高昌延昌二十七(五七八)年兵部條列買馬用錢頭數奏行文書」(66TAM4:8:25:31 〈錄〉『文書』三、七三—七四頁。〈寫〉『圖文』一、三三八頁ほか) よりうかがえる。すなわちこれらの文書には、ソグド人の名として、「曹頭六貪早」「曹伽那貪早」「康褥但」⁽⁴⁸⁾ などが見えている。⁽⁴⁹⁾ 他のオアシスでもソグド人がテュルク遊牧民風の名をもつことが見えているが、⁽⁵⁰⁾ トウルファンでは六世紀の段階、遅くとも七世紀初めにはこのことが確認できるのである。當地が天山山中や北麓のテュルク遊牧民と早くから密接な關係をもっていたことからすれば當然の現象であろう。こうしたことを考慮すれば、遊牧集團の使節を率いてきたのは、そのほとんどがソグド人であつた可能性すら出てくる。なお遊牧諸集團より派遣されてきたソグド人は、魏氏高昌國の「昭武九姓胡人曹莫門陀等名籍」のそれと比べて明らかなように、無姓であることを特徴としており、そのことがオアシ

ス國家に定住して活動するソグド人と區別する一つのメルクマールとなっている。

(二) 大官とソグド人

前掲一覽表を通覽して容易に氣づくのは、「大官 *tarqan*」という官稱號を有するものが多い點である。そして注目されるのは、そのなかにもソグド人が含まれていたらしいことである。たとえば表1「遊牧使節表」No.11に可汗の使者として掲げられている「烏都倫大官 *tarqan*」は、そうしたソグド人であった可能性が認められる。というのも、先の「昭武九姓胡人曹莫門陀等名籍」には、ソグド人の名として「(何)都倫」の名が見えているからである。さらに高昌都城の「市場」では、重さで取り引きされる商品を對象として「稱價錢」と呼ばれる賣買税が賣主・買主雙方より徴收されていたが、その徴收リストを内容とする内藏の上奏文書（「高昌内藏奏得稱價錢帳」73TAM514:24〈録〉『文書』三、三二八—三二五頁。〈寫〉『圖文』一、四五〇頁。）には、次のようにある。⁽⁵¹⁾

(前 缺)

16 「 價錢。

17 「 到廿九日、无稱價錢。

18 「 翟陀頭買銀八斤二兩、与何阿倫遮⁽⁵²⁾、二人邊

(得錢□文。何阿)

19 「 倫遮買金八兩半、与供勤大官、二人邊得錢□

(文。

20 「 斤、與安破毗多、二人邊得錢十四文。

(都合)

21

(後 缺)

□□得錢貳拾肆文。

本文書斷片の一九行目を見ると、ソグド人である何阿倫遮⁽⁵³⁾ (Renchak) が、金八兩半を「供勤大官 turgan」に賣り渡し、それに對して銀錢二文が「稱價錢」として二人に課されていたことが知られる。高昌都城の「市場」が、魏氏高昌國において對外的な交易を仕切る場であり、そこで取り引きするもののほとんどがソグド人であつたことを考えれば⁽⁵⁴⁾、ここに「大官」とあつても、その人物はテュルク遊牧民というよりも、ソグド人であつた可能性の方が高い。

そもそも「大官 turgan」は、西突厥可汗庭より玄奘を送つた「摩咄達官」の例で知り得るように、西突厥では使いにあたるものが、臨時的に turgan に封じられていた。すなわち、西突厥の可汗が玄奘を迦畢試國に送る際に、『慈恩傳』卷二(二九頁)に「可汗乃ち軍中に令し、漢語及び諸國の音を解する者を訪めしむるに、遂に年少を得たり。曾て長安に至ること數年にして漢語を通解すれば、即ち封じて摩咄達官と爲す」と見えており、西突厥では使者を派遣する際に用いたるものを臨時に達官 turgan に任ずることがあつた。前掲「遊牧使節表」の可汗の使節として派遣された「大官」も、こうした臨時的性格の官であつた可能性もあろう。

また『慈恩傳』卷二のこの「摩咄達官」については、これがソグド人であつた可能性さえ指摘されている⁽⁵⁵⁾。そこで想起されるのは、突厥のディザブロス(シルジブル。伊利可汗の弟にあたるか)⁽⁵⁶⁾可汗が絹の賣り込みのためにペルシアに派遣したマニアクというソグド人や、マニアク亡き後にローマに派遣された使者やそれに從つたマニアクの息子が、タルカンの官職を帯びて派遣されていたことである⁽⁵⁷⁾。ただし「大官 turgan」そのものは、「遊牧使節表」から明らかになように、必ずしも可汗の周りだけに居たわけではない。

「大官」については、未だ明確にはなっていない部分があるが、何れにしても先に掲げた高昌都城の「市場」で金を購入していた「供勤大官」は、西突厥の可汗もしくは遊牧諸集團より遣わされた使節のソグド人で、それが「市場」で交易に従事していた可能性は高からう。使節の一員のなかには「眞朱 *Bi:zi*」を名乗る「大官」がいたが（史料⑭）、「眞朱 *Bi:zi*」とは可汗や有力王族などの従者とみるのが妥當であらう。⁽⁵⁸⁾ ソグド人は、遊牧勢力の可汗・有力王族・部氏族長それぞれの側近もしくはパートナーとして仕え、彼らの使者として派遣されてきていたと推測できよう。ちなみに別稿で検討したように、ソグド人はオアシス國家である魏氏高昌國においても王の側近もしくはパートナーとして仕え、王の使者として派遣されていた。⁽⁵⁹⁾

（三） 使節と交易活動

ところで、先に挙げたように *qanāq* の使節として派遣されてきたソグド人のなかには、金銀器や鐵器の工匠たちが含まれていた。吳玉貴氏は、この事實から、次のような見解を提示している。すなわち彼らの存在から、テュルク遊牧民は金銀・鐵製品については自ら供給することが可能となっていた部分があると推測し、そのため貿易もしくは略奪によって得られた大量の金・銀などは、「貨幣」流通にまわす他、その相當部分を金銀器の制作に充てていた、とする。⁽⁶⁰⁾ 「大官」が高昌都城の「市場」で金を購入していた先の例も、この見解に基づき説明することは可能ではある。また大澤孝氏は、こうした工匠を西突厥可汗の宮廷における可汗直屬の工匠と解すると同時に、「高昌國を始めとする南方や西方のオアシス諸國に向き、金屬の販賣や交易に従事した商人」とみている。ただし他方で同氏は、「彼らの交易活動によって、南方や西方のオアシス諸國で本来、献上品や輸出品として作製された豪華な金銀製品が各種の絹織物や錦織物などと共に北方の遊牧國に流入していたこと」も指摘している。⁽⁶¹⁾

西突厥の可汗宮廷における金銀器制作の詳細は明かではなく、兩氏の見解も推測にもとづく部分は大きいが、こうした

可汗よりの使節の派遣が、自國の產品あるいは中繼交易品を販賣・轉賣し、併せてオアシス國家から求める奢侈品を交易などを通じて獲得することを重要な目的としていたことは十分に考えられる。先に掲げたディザブロス可汗がソグド人を使節として派遣した例は、突厥西面（西突厥）可汗がその當初より、こうした交易を展開しようとしていたことを傍證するものとなる。⁽⁶²⁾

他方、表1「遊牧使節表」には、No.15に「延堅珂頓-qatun」、No.16に「渾珂頓-qatun」が見えており、珂頓 qatun の使節が麴氏高昌國に派遣されていたが、その珂頓 qatun の名が前掲の「高昌延昌二十七（五七八）年兵部條列買馬用錢頭數奏行文書」に見えている。⁽⁶³⁾ すなわち、同國の兵部が馬を購入するにあたり、その賣人として舉げられているのが、「阿都瓠珂頓-qatun」⁽⁶⁴⁾とソグド人の「呼典畔陀 xwt'yn bntk」「康褥但」であった。このことは、金を購入していた前掲の「供勤大官」とは逆に、「阿都瓠珂頓-qatun」の使節が麴氏高昌國において馬を賣っていたことを示唆している。また「呼典畔陀 xwt'yn bntk」のように、姓の無いソグド人は、既に見てきたところから明らかなように、遊牧集團より派遣されてきたソグド人の特徴でもあった。したがってこの「呼典畔陀 xwt'yn bntk」も、そうした遊牧集團より派遣されてきたソグド人であった可能性が高い。そもそも xwt'yn bntk（王妃の僕）というその名も珂頓 qatun との繋がりがあるが、珂頓 qatun もソグド人を使節として派遣していたと見るべきであろう。時代的には降るが、西突厥の後繼者である突騎施においても、qatun である「公主」が「牙官」⁽⁶⁵⁾を派遣し、大量の馬を率いた交易使節團を安西（クチャ）にまで派遣していた。⁽⁶⁶⁾ また当該地域の遊牧民女性と馬所有ということに關わって參考になると思われるのは、『新唐書』卷一一七裴炎等傳（四二四九頁）に、北庭に流されていた裴仙先の妻が「降胡の女」であり、その妻が多くの「黃金・駿馬・牛・羊」を所有していたことから、裴仙先がその財を以て威勢を張っていたことである。

西突厥の qatun と馬の交易との具體的な關係は詳らかではないが、qatun の使節も可汗のそれと同様に交易活動を展開していたことは容易に推測されよう。

これ以外の遊牧集團の使節については、残念ながらその交易活動の一端を直接うかがわせる史料はない。しかしながら、先に指摘したように、これらの使節にも多くのソグド人が見えていることから、こうした交易活動を個々に行っていたと見て大過ないであろう。

以上を要するに、可汗を筆頭とする様々な遊牧諸集團の代表や隨行人にソグド人が多く當てられていたのは、その背景としてそれらの使節派遣の大きな目的の一つに交易があつたと考えるべきであろう。すなわち、遊牧國家における多様な遊牧集團のリーダーたちは、周邊に侍るソグド人らを代表もしくは隨行人に當てた使節をオアシス國家に派遣し、そこで宿食の便宜などをオアシス國家に強要し確保すると同時に、他方でオアシスに集積される様々な奢侈品を⁽⁶⁷⁾購入する機会とし、併せて自らの產品あるいは中繼交易品を賣りさばくこともしていたと見られるのである。

第三節 國家の事業としての使節の應接

先に検討したように遊牧國家における多様な遊牧集團が、數多くのソグド人を使節として派遣していた。いわばこうした使節の派遣とは、交易のためのキャラヴァン隊を組織することでもあつたのである。他方、別稿で検討したようにオアシス國家である麴氏高昌國においても、國內に定住するソグド人がおり、彼らのなかには國王に仕え交易活動に従事するものもいた[荒川二〇〇七、Arakawa 2008]。こうした事情は、そのほかのオアシス國家においても同様であつた可能性は高い。

そもそも、前掲表1の「オアシス國家の使節・客人」からもうかがえるように、遊牧國家だけでなくオアシス國家も使節を派遣していた。言うまでもなく、こうしたオアシス國家の使節、すなわちオアシス國王により派遣されるそれも、遠距離を旅する得難い機會となつていたと見られる。敦煌の歸義軍政權（敦煌王國）の例などよりうかがえるように、それは同時に重要な遠隔地交易の機會を作つていた。⁽⁶⁸⁾したがって、オアシス國家の使節も交易をその重要な目的としたことは

疑いなく、使節は交易のためのキャラバン隊とさほどの大きな差異はない。⁽⁶⁹⁾

もちろん同じく中央アジアのオアシス國家と呼ばれるものでも、ソグディアナ諸國のように、個々の商人が遠隔地交易を積極的に展開した國家もあるが、こうした交易を行うのには、これを運用できるだけの経験やそれに裏附けられた技能または自前のネットワークの存在を必要とし、オアシス諸國全體から見れば、きわめて限られた存在であったと見られる。そして、パミール以東にあるオアシス國家の商業は、對外交易については、外來および現地に移住聚落を構えたこのソグド人が中心的な役割を擔っていた。⁽⁷⁰⁾

オアシス國家が隣接するオアシス國家を越えて遠く使節を派遣するに当たり、君主の周りに侍るソグド人が介在しているのは當然のことであった。ソグド人が遊牧諸集團ばかりでなく、オアシス地帯の政治權力とも提携して交易を大きく推進していたことを銘記すべきであろう。

ただし言うまでもなく、こうした遊牧・オアシス雙方の政治權力と繋がったソグド人だけが交易をしていたわけではなく、多くのソグド商人が個々様々なたちで交易を展開していた。とりわけ彼らのなかには、前掲「高昌内藏奏得稱價錢帳」よりうかがえるように、トゥルファンで交易を終えても短期間のうちに再びトゥルファンに舞い戻ってくるソグド人が認められる。⁽⁷¹⁾ このことは彼らが、遠隔地に向かう交易ばかりでなく、近距離間を往還するだけの局地的な交易圏を形成していたことを示唆している。⁽⁷²⁾

しかしながら、こうした個々に展開される局地的な交易活動が他方において形成されていたとしても、國家・集團レベルで組織される大キャラヴァン隊の派遣が、そうした個々の交易活動にとつても沙漠をわたるうえで不可避的な略奪等のリスクを軽減する貴重な移動の機会を提供していたことも疑いない。たとえば『慈恩傳』卷一(二五頁)には、玄奘が麴氏高昌國王の手厚い保護をうけて、大キャラヴァン隊を組んで西突厥の可汗庭に向かう際に、カラシャール到着直前に起きた事件を次のように傳えている。

時に同侶の商胡數十、貪りて先に貿易せんとし、夜中に私かに發したるに、前去したること十餘里にして、賊に遇いて劫殺せられ、一も脱したる者無し。

本記事にある「同侶の商胡」とは、玄奘のために魏氏高昌國王が組織した大キャラヴァン隊と行動をともにしていたソグド商人であり、その數も數十人單位に上るものであったことが知られる。目先のわずかな利益を追究するために、キャラヴァン隊を離れて、いち早くカラシヤールに到着しようとする彼らの行動からして、彼ら自身はトゥルファンとカラシヤールを往還する近距離交易を主體とする商人であつた可能性は高く、この事件はそうした彼らにとつても大キャラヴァン隊と同行することが、如何に略奪等のリスクを減ずるものであつたのかを如實に傳えている。

また『周書』卷五〇異域傳下（九一三頁）には、吐谷渾王（可汗）⁽⁷⁴⁾が北齊に向け派遣した使節（キャラヴァン隊）にソグド商人が二四〇人も參加していたことが傳えられている。本論で検討した西突厥の使節も、同じような時期における遊牧國家の使節として、使節本體とは本來關係がない多くのソグド商人を寄せ集めながら派遣されることが多かつたと見て大過なからう。

中央アジアにおいて遠距離をわたる交易は、遊牧・オアシス雙方の國家・集團が、それぞれに組織して派遣するキャラヴァン隊が、個々の様々なソグド商人を誘致・吸収しながら展開されていたと見て良からう。しかもそうしたキャラヴァン隊の派遣がきわめて頻繁に行われていたことは、可汗を筆頭にした遊牧諸集團のそれを例として、ここに検討した通りである。ソグド商人にとっては、遠距離か近距離かを問わず、遊牧諸集團およびオアシス國家から遣わされる數多くの使節（キャラヴァン隊）が、安全に沙磧・草原をわたる機會を提供するものとなつていたのである。

このように遊牧・オアシス雙方の使節の移動に附隨して、多くのソグド商人が移動していたことが、オアシスを物品集散の交易據點としながら、中央アジアの交易活動を廣域にわたつて活性化させるものとなつた。そしてオアシス國家にと

つては、こうした使節が滞りなく來訪してくれることが、ソグド商人を誘導してくれるという意味で、その國家の繁榮を左右するものとなっていたと見られる。

そもそもソグド商人を如何に多く呼び込むかが、國家の存亡にも關わる重要事とオアシス國家自身が考えていたことは、魏氏高昌國と隣國のカラシャール國との確執を見れば明瞭である。すなわち、貞觀六（六三二）年に、カラシャール國が隋末の亂以來閉ざされていた「大磧路」（敦煌よりロブノールの西北角を經由してカラシャールにおよぶルート）を再開しようと畫策しようとしたのに對して、それによつてトウルファン經由の交通ルートが衰退し、商旅の利を喪失すると危惧した魏氏高昌國が、カラシャール國を武力攻撃している。⁽⁷⁵⁾

オアシス國家とすれば、前掲表1からもうかがえるように、外來使節のなかでも、様々な集團を包含する遊牧國家から派遣される使節が大きな部分を占めており、その受け入れは多大な負擔をとまなうものであった。本論では検討する餘裕はなかったが、遊牧諸集團の使節は宿食の便宜だけでなく、手土産としてオアシスの特産品や奢侈品を確保していたこともトウルファン文書よりうかがえ、それら使節がオアシス國家に集積される富を收奪していた側面があったことは確かである。ただし他方で彼らの使節を受け入れることで、その恣意的な略奪を防ぐことになったと考えられることに加えて、先に見たように、オアシス國家がキャラヴァン隊の來訪を誘致する立場であったことを見れば、その受け入れを促進すべきものでさえあった。オアシス國家にとって、可汗との政治的統屬關係のもとに様々な集團を包含する遊牧國家からの使節を應接することは、國家としての義務であつたと同時に、それは多くのソグド商人と商旅の利をもたらししてくれるキャラヴァン隊を國家として接待することでもあつたのである。

結 び

はじめにも述べたように、軍事的優位に立つ遊牧民と、富を集積するオアシス民との共生關係は、中央ユーラシアの社

會を基本的に特徴づけるものであった。ただし兩者の關係は、なお十分に明確になっているとは言いがたい。とくに兩者の共生關係を捉えるにあたっては、身近に接觸し合う基層レベルでの關係と國家レベルでの關係を峻別するとともに、兩者の關係の多様性にも十分に配慮すべきであろう。このうち本論では主に國家レベルでの兩者の共生關係に焦點を合わせて検討した。

この點については、これまでも指摘されてきたように、オアシス國家は遊牧國家の收奪の対象となると同時に、遊牧國家はオアシス國家に軍事的な庇護を與えており、そこに相利的な共生關係が生じていたのは事實である。しかしながら、これは兩者が構築していた共生關係の一側面でしかない。

西突厥と麴氏高昌國を例として見てみると、遊牧國家とオアシス國家の共生關係としてこれまで我々が大きく見落としてきたものは、遊牧國家が内包する多様な遊牧集團による使節の組織・派遣と、オアシス國家によるその受け入れの互恵的な關係であつたことが知られる。すなわち、遊牧國家における多様な遊牧集團のリーダーたちは、周邊に待るソグド人らを代表もしくは隨行人に當てた使節を頻繁にオアシス國家に派遣し、宿食の便宜などを強要し確保しつつ、オアシスに集積される様々な奢侈品を購入する機會とし、併せて自らの產品あるいは中繼交易品を賣りさばくこともしていたと見られるのである。いわばこうした使節の派遣とは、交易のためのキャラヴァン隊を組織することであつた。他方、オアシス國家にしてみても、遊牧諸集團による使節の派遣とその受け入れは、遊牧國家の收奪の側面ばかりではない。遊牧諸集團の恣意的な略奪を防ぐとともに、様々な立場のソグド商人を護衛・誘導し、交易活動の活性化にともなう繁榮をもたらしてくれる側面があつたのである。

さらに既に觸れたように、遊牧勢力だけでなくオアシス國家自身も、使節を派遣していた。なかでも麴氏高昌國のようなオアシス國家では、先に述べたように王の周邊にソグド人集團が侍っており、その王が派遣する使節も、前掲の玄奘の例からも明らかなように、安全な遠距離移動の機會を提供するものとして、使節とは關係のない多くの個々のソグド商人

を引き付けていた。つまり中央アジアにおいて遠距離をわたる交易は、遊牧・オアシス双方の國家・集團が、それぞれに組織して派遣する使節（キャラヴァン隊）が、個々の様々なソグド商人を誘致・吸収しながら展開されていたのである。それ故にオアシス國家にとって、遊牧諸集團をはじめとする様々な使節を應接することは、多くのソグド商人を寄せ集め商旅の利をもたしらしてくれるキャラヴァン隊を接待することでもあり、それは國家の盛衰にかかわるものとして、重要な國家的事業となっていたと見られる。また本論で検討した魏氏高昌國だけでなく、こうした使節の應接が五世紀の柔然支配下における闕氏高昌國で行われていたことが、近年新たに発見されたトゥルファン文書 [97SYM1.13.4, 5a] からもうかがえる。⁽⁷⁾

強大な遊牧國家の成立が中央アジアにもたらしたものの、それは遊牧國家の可汗とオアシス國家の「王」との政治的統屬關係にもとづく共生關係の構築であり、そのもとで草原・沙漠地帯にわたる廣域的な秩序が形成されるとともに、國家や集團による多様な使節（キャラヴァン隊）の派遣がなけば常態化していた。このことが中央アジアの交易を活性化させることになったのである。

【引用文献略号】

『文書』……國家文物局古文獻研究室・新疆維吾爾自治區博物館・武漢大學歷史系（編）『吐魯番出土文書』一一〇、文物出版社、一九八一—一九九一。

『圖文』……唐長孺（主編）、中國文物研究所・新疆維吾爾自治區博物館・武漢大學歷史系（編）『吐魯番出土文書』一一四、文物出版社、一九九二—一九九六。

【引用文献目録】

荒川正晴

一九九九 「ソグド人の移住聚落と東方交易活動」『商人と市場』（岩波講座世界歴史一五）、岩波書店、八一—一〇三頁。

二〇〇三 『オアシス國家とキャラヴァン交易』山川出版社。

二〇〇七 「魏氏高昌國の王權とソグド人」『福井重雅先生古稀・退職記念論集 古代東アジアの社會と文化』汲古書院、三三七

池田温

— 三六二頁。

一九六五

『八世紀中葉における敦煌のソグド人聚落』『ユーラシア文化研究』一、四九—九二頁。

一九八〇

『敦煌の流通經濟』『講座敦煌三 敦煌の社會』大東出版社、二九七—三四三頁（再録：同氏『敦煌文書の世界』名著刊行會、二〇〇三、一一九—一八一頁）。

伊瀬仙太郎

一九五五

『中國西域經營史研究』巖南堂書店。

榮新江（青木茂・關尾史郎譯注）

一九九〇

『吐魯番の歴史と文化（Ⅲ）』『會報』四七、一—六（中文初版：胡戟ほか『吐魯番』三秦出版社、一九八七）。

榎一雄

一九七四

『明末の肅州』『宇野哲人先生白壽祝賀記念 東洋學論叢』東方學會（再録：同氏『シルクロードの歴史から』研文出版、一九七九、一五—一七〇頁。『榎一雄著作集三 中央アジア史Ⅲ』汲古書院、一九九三、一五九—一七九頁）。

大澤孝

一九九九

『新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について——突厥初世の王統に關する一資料——』『國立民族學博物館研究紀要報告 別冊』二〇、三二七—三七八頁。

坂尻彰宏

二〇〇八

『歸ってきた男——草原とオアシスのあいだ——』『世界史を書き直す 日本史を書き直す——阪大史學の挑戦——』和泉書院、三七—七五頁。

眞田安

一九七七

『オアシス・バーザールの靜態研究——一九世紀後半カシユガリアの場合——』『大學院研究年報』（中央大學）六、二〇七—二二〇頁。

嶋崎昌

一九八六

『都市・農村・遊牧』『講座イスラム三 イスラム・社會のシステム』筑摩書房、一〇八—一四八頁。

一九七七

『隋唐時代の東トウルキスタン研究——高昌國史研究を中心として——』東京大學出版會。

白石典之

二〇〇二 『モンゴル帝國史の考古學的研究』同成社。

杉山正明

一九九二 『大モンゴルの世界——陸と海の巨大帝國——』（角川選書 三二七）、角川書店。

一九九三 『世界史と遊牧民』板垣雄三（編）『地域からの世界史 二 世界史の構想』朝日新聞社、一七七—一九七頁。

關尾史郎

一九九三 「義和政變」新釋——隋・唐交替期の高昌國・遊牧勢力・中國王朝——『集刊東洋學』七〇、四一—五七頁。

一九九八 『西域文書からみた中國史』（世界史リブレット 一〇）、山川出版社。

内藤みどり

一九八八 『西突厥史の研究』早稻田大學出版部。

羽田明

一九六九 『西域』（世界の歴史 一〇）、河出書房新社（再刊：一九八九）。

堀川徹

二〇〇四 「オアシス農耕社會」間野英二・堀川徹（編著）『中央アジアの歴史・社會・文化』放送大學教育振興會、一三六—一四八頁。

四八頁。

松田壽男

一九五五 『中央アジア史』（アテネ文庫 三三八）、弘文堂（再録：『松田壽男著作集』一、一九八六、六興出版、一六七—二三二頁）。

一九六六 『砂漠の文化——中央アジアと東西交渉——』（中公新書 二二二）、東京、中央公論社、（再録：『松田壽男著作集』一、東京、六興出版、一九八六。再刊：同時代ライブラリー 一八一、東京、岩波書店、一九九四）。

一九七〇 『古代天山の歴史地理學的研究 増補版』早稻田大學出版部。

間野英二

一九七七 『中央アジアの歴史——草原とオアシスの世界——』（講談社現代新書 四五八 新書東洋史 八）、東京、講談社。

一九九二 『內陸アジア史總論』間野英二（他著）『地域からの世界史 六 內陸アジア』東京、朝日新聞社、三一—一九頁。

護雅夫

一九六七A 『突厥の國家と社會』『古代トルコ民族史研究』一、山川出版社、一—二三三頁。

- 一九六七B 「突厥第一帝國における *Qaghan* 號の研究」『古代トルコ民族史研究』一、山川出版社、二三七—二九八頁。
 一九六七C 「鐵勒諸部における *etibar* *hikan* 號の研究」『古代トルコ民族史研究』一、山川出版社、三九八—四三八頁。
 一九七六 「ソグド商人の足跡を追って」『古代遊牧帝國』（中公新書四三七）、中央公論社、一六二—二〇七頁。
 森安孝夫

一九九一 「ウイグルⅡマニ敎史の研究」大阪大學文學部（大阪大學文學部紀要）三一・三二）。
 二〇〇七A 「シルクロードと唐帝國」（興亡の世界史）五、講談社。

二〇〇七B 「唐代における胡と佛敎的世界地理」『東洋史研究』六六—三、一一三—三頁（横組）。

吉田豊

一九八九 「ソグド語の人名を再構する」『三省堂ぶつくれつ』七八、六六—七一頁。

一九九〇 「ソグド語雜錄（Ⅲ）」『内陸アジア言語の研究』五、九二—一〇七頁。

一九九八 「Sino-Iranica」『西南アジア研究』四八、三三—五一頁。

二〇〇〇A Further remarks on the Sino-Uighur problem 『アジア言語論叢』三（神戸市外國語大學外國學研究四五）、一一—一頁。

二〇〇〇B 「オアシスの道——玄奘は何語で旅をしたか——」『言語』二〇〇—六、三九—四三頁。

姜伯勤

一九九〇 「高昌麴朝與東西突厥——吐魯番所出客館文書研究——」北京大學中國中古史研究中心（編）『敦煌吐魯番文獻研究論集』五、北京大學出版社、三三—五一頁。

一九九四 「敦煌吐魯番文書與絲綢之路」文物出版社。

錢伯泉

一九九二 「從吐魯番文書看薛延陀前期歷史」『西域研究』一九九二—一、一〇四—一四頁。

一九九五 「從傳供狀和客館文書看高昌王國與突厥的關係」『西域研究』一九九五—一、八七—九六頁。

榮新江

二〇〇七 「闐氏高昌王國與柔然・西域的關係」『歷史研究』二〇〇七—二、四—一四頁。

王欣

一九九一 「麴氏高昌國與北方遊牧民族的關係」『西北民族研究』一九九一—二、一八九—一九七頁。

王素

一九八三 〈吐魯番出土文書〉前三冊評介『中國史研究』一九八三—一、一五五—一六三頁。

一九九七 『吐魯番出土高昌文獻編年』新文豐出版公司。

二〇〇〇 『高昌史稿 交通編』文物出版社。

吳玉貴

一九九〇 「試論兩件高昌供食文書」『中國史研究』一九九〇—一、七〇—八〇頁。

一九九一 「高昌供食文書中的突厥」『西北民族研究』一九九一—一、四六—六六頁。

一九九八 「突厥汗國與隋唐關係史研究」(唐研究基金會叢書)、中國社會科學出版社。

朱雷

一九八二 「魏氏高昌王國的『稱價錢』——魏朝稅制零拾——」『魏晉南北朝隋唐史資料』四、一七—二四頁。

Arakawa, M.

2008 Sogdians and the Royal House of Ch'ü in the Kaochiang Kingdom. *Acta Asiatica* 94, pp.67-93.

Karlgren, B.

1972 *Grammata Serica Recensa*. Stockholm.

Pelliot, P.

2002 *Les Routes de la Région de Turfan sous les T'ang suivi de l'histoire et la Géographie Anciennes de l'Asie Centrale dans l'immensité de l'Asie*. Paris, Institut des Hautes Études Chinoises du Collège de France.

Sims-Williams, N.

1992 *Sogdian and Other Iranian Inscriptions of the Upper Indus 2 (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III-II)*. London, SOAS.

1996 The Sogdian merchants in China and India, In A. Cadonna and L. Lanciotti (ed.), *Cina e Iran da Alessandro Magno alla dinastia Tang*, Firenze: Leo S. Olshchi Editore, Orientalia Venetiana 5, pp.45-67.

Yoshida, Y./Kageyama, E.

2005 Sogdian names in Chinese characters, Pinyin, reconstructed Sogdian pronunciation, and English meanings, in: E. de la Vaissière and E. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp.305-306.

註

(1) 森安孝夫氏が指摘するように、中央アジアという語には廣狹兩義のみならず、その中間的な用法さえあり、「これを厳密に定義することは不可能なだけでなく不都合さえ生ずる」。森安二〇〇七A、五八―五九頁。森安氏に従い、中央アジアについては、草原地帯を含む廣義のトルキスタンを指す語としてこれを使用することとする。したがってパミール以東の中央アジアであれば、それは天山の南北に廣がる草原・オアシス地帯を指すことになる。

(2) 松田一九五五(再録一九八六、一八五―一八六頁)、松田一九六六(再録一九八六、一二五―一二九頁、再刊一九九四、一五五―一六〇頁)、松田一九七〇、二四六頁、羽田一九六九、一四頁、護一九七六、一七七頁、間野一九七七、八五―八七頁、間野一九九二、一五―一六頁、杉山一九九二、四五―四六頁、杉山一九九三、一八六頁、堀川二〇〇四、一四四―一四七頁。

(3) 白石典之氏が指摘するように、遊牧國家という用語は多分に検討すべき課題を含んでいるが、それに替わる適當な表現も今のところなく、ここでは便宜上この語を用いておく。白石二〇〇二、三六八―三七九頁、三九五頁注(86)。

(4) 本稿は、『近代世界システム以前の諸地域システムと廣域ネットワーク』(桃木至朗代表、平成二六―一八年度科研費研究成果報告書、二〇〇七年三月、二八―四八頁)に載せた拙論「遊牧民とオアシス民の共生關係とは何か…西突厥と魏氏高昌國のケースから」を増補改訂したものであ

る。また最近、坂尻彰宏氏により敦煌オアシスと身近な遊牧集團との共生關係を検討する論攷が公表された。坂尻二〇〇八。西突厥とトゥルファンのおアシス國家との共生關係を検討する本論とは、時代も地域も對象とする遊牧集團の次元も異なるが、身近な遊牧集團との共生關係を具體的に明らかにした貴重な事例研究となっている。併せ参照されたい。

(5) 吳玉貴氏は、吐屯の主要職務は、國政の監督にあつたのではなく、「征賦」上納の監督にあつたとする。吳玉貴一九九八、五〇頁。

(6) これが、統葉護可汗の獨創であつたわけではなく、從來の支配方式を繼承したものであつたことは、既に指摘されている。内藤一九八八、一三二頁。なお統葉護可汗以外の時代において、天山以南のおアシス諸國で頡利發 *Tardu* の稱號を授與されていたことを確認できるのは、現在のところ龜茲國と高昌國および吐火羅國だけであるが、それ以外のおアシス諸國も同様に突厥の官稱號を一律に授與されていたと思われる。松田一九七〇、二七五―二七六頁・二七九頁、嶋崎一九七七、一九三頁・二八六頁、内藤一九八八、一三五頁。

(7) 『圖文』(二、四一九頁)には、⑧の「高昌令狐等傳供食帳」と一連の文書として607AM307.53(6)が挙げられているが、その内容は⑧と書式は同じであるものの、穀物の支出先は遊牧勢力からの使節ではない。ここでは「高昌令狐等傳供食帳」と接續する文書として、これを取り上げ

ることはしない。

- (8) ③には「康將」「傳」、市肉三節、自死肉十二節、麵一斛五斗、供客胡十五人賞」とあり、「客胡」に對して、「賞」として肉や麵が支出されており、それを康將が某部に傳えていた。康將とはソグド人の「將」であった可能性は高く、これが「客胡」への食料支給を「傳」していたのである。なお唐代において客胡とは、商胡などとともに、ほとんどはソグド人を指している。Cf. 森安二〇〇七A、一〇六一—一〇七頁。この③「重光三(六二二)年」に見える「客胡」もソグド人を指している可能性はきわめて高い。また單に「胡」とある場合も、既に森安孝夫氏が明らかにしているように、少なくとも盛唐から中唐の終わり頃にあつては「胡」はソグド(人・語)を意味するのが一般的である。ただし、森安氏も指摘するように「胡」がすべてソグド(人・語)を意味しているわけではなく、とりわけ盛唐以前の時期では「胡」の内容を慎重に見きわめる必要がある。Cf. 森安二〇〇七B、四—二四頁。たとえば本論において引用する『新唐書』卷一一七 裴炎等傳の「降胡の女」の「胡」は、ソグド人ではなく北庭周邊の遊牧民を指している。

- (9) 「供糧食帳」については、吳玉貴氏をはじめ既に多くの研究者によって取り上げられている(吳玉貴一九九〇、一九九一。Cf. 王素一九九七、二〇七—二〇八頁・二九二—二九三頁)。その他の文書についても、王素一九九七を参照されたい。

- (10) 阿博珂寒Ⅱ阿波可汗(大邏使)および貪渾珂寒Ⅱ貪汗可汗であることについては、王素氏がこの見解を提唱して以來、多くの研究者がこれを追認している。王素一九八三、一六二頁、王素二〇〇〇、四四六—四四八頁、姜伯勤一九九〇、三七—三八頁、姜伯勤一九九四、九一頁、錢伯泉一九九五、八八—八九頁・九一—九三頁、大澤一九九三、三三九頁、關尾一九九三、五五頁注(16)。

- (11) なお貪汗については、「Tamyān」説(Dehliot 2002, pp. 70-71)と「貪汗山」説(姜伯勤一九九四、九二頁ほか)とがある。

- (12) 尼利珂蜜(寒)Ⅱ泥利可汗および卑失地婆護Ⅱ婆實特勤であることについては、姜伯勤一九九〇、三八—三九頁、姜伯勤一九九四、九三—九四頁、錢伯泉一九九五、八九—九〇頁、大澤一九九三・三三九頁・三五四頁・三六六頁注(18)、王素二〇〇〇、四五四—四五六頁。またこの可汗が麴氏高昌國に使いを遣わし得た時期(すなわち在位時期)について、これを五八七—五九九年に比定したのは内藤一九八八頁、四一九—四二二頁、錢伯泉一九九五、八九—九〇頁、大澤一九九三、三三七—三四六頁・三五四頁である。これに對して嶋崎昌・吳玉貴・王素諸氏は、泥利可汗の在位を五八七—六〇三・六〇四年とする。嶋崎一九七七、三二九頁、吳玉貴一九九一、五一頁、王素二〇〇〇、四五四—四五六頁。これに基づいて王素氏は、尼利珂蜜(寒)(泥利可汗)と卑失地婆護(婆實特勤)が同時に記される文書年代を六〇三—六〇四年に比定している。王素

二〇〇〇、四五六頁。泥利可汗の在位年代については、未だ何れとも決しがたいが、本論では、嶋崎昌・吳玉貴・王素諸氏らの見解に據る。

- (13) 恕邏珂寒Ⅱ泥掘處羅可汗であることについては、王素一九八三、一六二頁、王素二〇〇〇、四五四頁、姜伯勤一九九〇、三九頁、姜伯勤一九九四、九四—九五頁、王欣一九九一、一九五—一九六頁。これに對して錢伯泉一九九五、九〇—九一頁は、處羅可汗俟利弗設に比定する。またこの可汗が麴氏高昌國に使いを遣わし得た時期（すなわち在位年代）について、これを六〇四—六〇一年に比定したのは姜伯勤一九九〇、三九頁、姜伯勤一九九四、九四頁、吳玉貴一九九一、五一頁、王素二〇〇〇、四五五頁である。これに對して、内藤・錢伯泉・大澤諸氏は處羅可汗の治世初年を開皇末期（五九九—六〇〇年）と見る。内藤一九八八、一〇一頁、錢伯泉一九九五、八九—九〇頁、大澤一九九九、三五四頁。
- (14) Cf. 姜伯勤一九九〇、三八頁、吳玉貴一九九一、四九頁、大澤一九九九、三五四頁。
- (15) 王素氏は、恕邏珂寒（處羅可汗）と卑失地婆護（婆質特勤）が同時に記される文書年代が、六〇四—六〇五年に限定されることを主張する。王素二〇〇〇、四五六頁。
- (16) 王素二〇〇〇、四五六頁。
- (17) 王素一九八三、一六二頁、王素二〇〇〇、四四八—四五頁、吳玉貴一九九一、五四頁、王欣一九九一、一九五—一九六頁、關尾一九九三、五五注（16）、大澤一九九九、

三三九頁。また、この北廂珂寒と南廂珂寒を、薛延陀首領の乙失鉢必と鐵勒の大可汗・契苾歌勒のことを指しているという説も提出されているが、あまり説得力はない。錢伯泉一九九二、一〇七頁。また詳細は不明であるが、トゥルファン文書（「唐開元二十二年（七三四）年八月西州都督府關」73TAM509:232-1〈錄〉『文書』九、一〇四—一〇五頁。〈寫〉『圖文』四、三一—三五頁）に「今共曹長史、與此首領計會、傳可汗……」と見える「可汗」は、當時のトゥルファン周邊の政治情勢から判斷して、これも小可汗であった可能性はある。

- (18) ⑨の文書に「供射」[] (60TAM329:231, 232) 〈錄〉『文書』三、三四—三五頁。〈寫〉『圖文』一、四六一頁。という表現もあり、これも遊牧集團からの使節であった可能性が高いが、どのような集團かまったくわからなかったため、こゝでは除外した。
- (19) Yoshida / Kageyama 2005, p.305.
- (20) Yoshida / Kageyama 2005, p.305.
- (21) Cf. 吉田一九八九、六九—七〇頁。
- (22) 卑失を波質の音通と認め、さらにこれを波質テギンと解する研究者が多い。もちろん卑失（畢失・苾悉）と言え、突厥族を構成する諸氏族（阿史那・阿史德氏のほか少なくとも數個の氏族）の一つを想起するが（護一九六七A、五三一—五四頁注（31）、護一九六七B、二七九注（5）、トゥルファンをめぐる政治情勢を考慮するならば、多くの研究者が指摘するようにこれを波質テギンと解するべきであ

ろう。

- (23) 棧頭については、これを薛延陀と解する見解がある。姜伯勤一九九四、一一一一—一二三頁、王素二〇〇〇、四九六—四九八頁。
- (24) Yoshida / Kageyama 2005, p.305.
- (25) Yoshida / Kageyama 2005, p.305.
- (26) 阿都紇については、これを阿跌と解する見解がある。王素二〇〇〇、四九八—四九九頁。姜伯勤氏は、阿都を阿跌と取る。姜伯勤一九九四、一〇六一—一〇七頁。
- (27) 婆瓠を僕骨(bogu, 護一九六七A、一八〇頁)と見る見解がある。姜伯勤一九九四、一〇八頁、王素二〇〇〇、四九四頁。しばらくこの見解に従う。
- (28) 鷄弊零を契必(契弊)と見る見解がある。姜伯勤一九九四、一〇九—一一〇頁、王素二〇〇〇、四九五—四九六頁。
- (29) 聖吳が伊吾であることについては、王素一九八三、一六一、王素二〇〇〇、四八七—四八八頁参照。
- (30) 射脾については、射脾侯斤が見えている。『新唐書』卷二一八沙陀傳(六一五四頁)
- (31) Teguは、可汗の子弟とその一族にしか附與されない稱號とされる(護一九六七C、四〇七頁)。このなかには可汗の母親の弟(たとえば都藍可汗の母の弟、褥但特勒)なども含まれている。Cf.『隋書』卷八四北狄傳突厥の條(一八六五、一八七一頁)。
- (32) Tegu-targan-irkin-yabyuを寫すのに、それぞれ提勤・大官・希瑾・移浮孤という漢字を用いていることについては、

魏氏高昌國の漢語の發音についても検討している吉田二〇〇〇A、九一一頁を参照のこと。また拙(**zidi* *iti*, Karlgren 1972, p.99)が*sad*を寫した漢字であると考ええることに問題がないことを吉田氏にご教示いただいた。

- (33) 吳玉貴一九九〇、七六頁。なお⑤(60TAM307:5/3(a), 5/2(a), 5/4, 5/5(a))と⑦(60TAM307:5/1(a), 4/4(a), 4/3(a))の諸斷片の配列については、煩雜になるためここの詳しい検討は省くが、糧食支給終了日を基準にすると、5/5(a)を除いてほぼ以下のような順序にあったと推定できる。
60TAM307:4/3(a)↓60TAM307:5/3(a)↓60TAM307:5/2(a)↓60TAM307:5/4 + 60TAM307:5/1(a)⇒60TAM307:4/4(a)。ただし吳玉貴氏は、冒頭部分を60TAM307:4/3(a)↓60TAM307:5/2(a)⇒60TAM307:5/3(a)の順に復元する。吳玉貴一九九〇、七七頁。
- (34) 松田一九七〇、二八一頁。
- (35) 松田一九七〇、二八〇—二八一頁、大澤一九九九、三三七頁。なお王素氏は、五八五年の段階で、沙鉢略が漠南に、阿波が漠北に、また達頭が西域によっていた情勢を想定されているが、明確な根拠がない限り従えない。王素二〇〇〇、四四二頁。
- (36) 榮新江(青木・關尾譯注)一九九〇、二頁。
- (37) 松田一九七〇、二八三頁。また松田氏は、西突厥初期の王庭は、①クチャ北方の大ウルドゥス河の盆地と、②素葉(碎葉)城「トクマク附近」から千泉[Mik]にかけてのオアシス群にしばらくられることを指摘する。松田一九七〇、

二九〇頁。なお大澤氏は、五八三年に達頭可汗のもとに逃れた阿博珂寒が、イリ方面に據って獨立したとする。大澤一九九、三三七頁。

(38) 吳玉貴一九九〇、八〇頁。

(39) *ḫwcyk* にこいつは、Sims-Williams 1992, pp. 40-41, 1996, p. 64 を参照。また居職が、*ḫwcyk* というソグド語に比定できることは、吉田豊氏よりご教示いただいた。Cf. Yoshida / Kageyama 2005, p. 305. なお大澤一九九、三五九頁にも指摘がある。

(40) 吳玉貴一九九一、五七頁、大澤一九九、三五九頁。

(41) 姜伯勤一九九〇、三七頁、吳玉貴一九九一、四九頁。

(42) 吉田豊氏によればトゥルファン文書などに見える(曹)浮夜門畔陀・(康)婆何畔陀は、それぞれソグド語の *byrnyntk* (Byzantian の僕)、*byrnyntk* (神の僕) の、また

(康)莫毗多是 *nixdyrt* の漢字音寫である。吉田一九八九、六九一七〇頁、吉田一九九〇、九七頁、吉田一九九八、三八一三九頁。とくに莫毗多是ソグド文字による署名が残されている。吉田一九九八、三八一三九頁。これに従えば、莫畔陀は、*nixdyntk* の漢字音寫となろう。Cf. 大澤一九九、三五九頁、Yoshida / Kageyama 2005, p. 305. なお *nixdyntk* はインダス河上流に残されている「落書き」に在證されている。Sims-Williams 1992, p. 52.

(43) 吳玉貴一九九一、五七頁、大澤一九九、三五九頁。

(44) ソグド人の名である呼典畔陀はソグド語 *xwfyndntk* (王妃の僕) の漢字音寫である。呼典は吉田一九八九、六九一

七〇頁、畔陀は吉田一九九〇、九七頁などを参照。

(45) Cf. Yoshida / Kageyama 2005, p. 305.

(46) 脾姿 *pyrk* は、畢姿とも漢字表記される。吉田一九九〇、九五頁注(14)。Cf. Yoshida / Kageyama 2005, p. 305.

(47) 「昭武九姓胡人曹莫門陀等名籍」が出土したアスターナ三一號墓は、重光元(六二〇)年に作成された隨葬衣物疏がただ一件のみ出土しており、本墓が夫婦合葬墓であったことを示す證據もない。したがって、墓室に埋納された本名籍は、重光元年以前に作成されたものと見てよからう。

(48) 66TAM48.35, 40 (〈錄〉「文書」三、八六頁。〈寫〉「圖文」一、三四四頁)。また「隋書」卷八四北狄傳 突厥の條、一八六五頁・一八七一頁には、「佗鉢可汗の弟の褥但可汗の子を步離可汗とした」という記事や、都藍可汗の母がその弟の褥但特勒を使者として隋に遣ると、「皇帝は褥但特勒を柱國に任じ、康國公とした」という記事が見えている。とくに隋が彼を「康國公」に任じたことは注目される。なお護雅夫氏は、「褥但特勒」は突厥本國における官稱號とする。護一九六七A、七二頁。

(49) このほか「曹枯痲度」もテュルク遊牧民風の名であった可能性がある。表1「遊牧使節表」No. 19 には、提勲 Tegin 珂都虔の名が認められる。

(50) 八世紀、敦煌オアシスのソグド人聚落においても、「達漢」「特勲」「莫賀咄」「吐屯」「烏蘇密」「逸斤」など、ソグド人がテュルク遊牧民風の名を有する例が見えている。池田一九六五、六三一六五頁。

- (51) 本文書を検討する文献の網羅的な情報は、王素一九九七、三一七頁に與えられている。王素氏は暫定的に本文書を延壽十七(六四〇)年前に置いている。
- (52) 『文書』『圖文』ともに、「阿何倫遮」とするが、實見したところ「何阿倫遮」である。
- (53) Yoshida / Kageyama 2005, p.305.
- (54) 姜伯勤一九九四、一七五—一八〇頁、荒川二〇〇三、三五頁ほか。
- (55) 吉田二〇〇〇B、四〇頁。
- (56) 室點蜜(イステミ)可汗。松田一九七〇、二五七—二五九頁、内藤一九八八、三八五頁注(1)。
- (57) 「メナンドリ・プロテクトリス・フラグメンタ」ギリシア語史料。内藤一九八八、三八一頁・三八九—三九〇頁注(16)。内藤氏はマニアクとその息子が、どちらもタルカンに就いていたと解する。
- (58) 「可汗・有力王族・部氏族長などが私的に所有した隷屬民ないし従士・従者」と解し得ることが、森安孝夫氏により提唱されている。史料⑭に見える「眞朱」も、この解釋を適用することができる。森安一九九一、一九六頁。
- (59) 荒川二〇〇七、Arkava 2008。麴氏高昌國では史姓ソグド人たちが、王に近侍する「侍郎」や「通事令史」などに就任し、王のために各地に遣わされていたことがうかがえる。
- (60) 吳玉貴一九九一、五八頁。
- (61) 大澤一九九九、三五九—三六〇頁。
- (62) マニアクおよびその息子等が、ディザブロス可汗によりペルシアや東ローマに派遣されたのは、絹の賣り込みのためではあるが(内藤一九八八、三七六—三七八頁)、當然のことながら絹以外の産品も交易の対象としていたことは疑いない。
- (63) 66TAM48:26〈録〉『文書』三、八一頁。〈寫〉『圖文』一、三四二頁。
- (64) 「阿都瓠」については、鐵勒の「阿跌」「訶咥」(Adz)と解する説が提出されているが、ほとんど説得力がなく、ここでは従わない。王素二〇〇〇、四九八—四九九頁。これとは別に林俊雄氏より「阿都瓠」の「阿都」は、テュルク語で馬を意味する馬、ではないかとご教示いただいた。
- (65) 「牙官」は單に屬官ほどの意味しかないが、ここでは公主の「大官 tarkan」を指していると見られる。
- (66) 『舊唐書』卷一九四下 突厥傳下(五一九一頁)、「資治通鑑」卷二二三 唐紀二九 開元十四(七二六)年の條(六七七五頁)。Cf. 伊瀨一九五五、三〇九—三二〇頁。
- (67) 麴氏高昌國では、ソグド人たちによって人馬・高級織物のほか、「金・銀・絲・香・郁金根・硃沙・銅・鍮石・藥・石蜜」などの商品が賣買されていた。前掲「高昌内藏奏得稱價錢帳」(73TAM51:2/1etc.〈録〉『文書』三、三一八—三二五頁。〈寫〉『圖文』一、四五〇—四五三頁)。Cf. 朱雷一九八二、二二—二三頁、姜伯勤一九九四、一七六—一七九頁ほか。
- (68) 池田一九八〇、三三三頁(再録二〇〇三、一五五頁)。

(69) 時代的には降るが、明代のカシユガルを例として、明への朝貢使としての權利をカシユガル王から商人が買い取り、その商人が参加者を募ってキャラヴァン隊を組織していたことが、榎一雄氏により指摘されている。榎一九七四（再録一九七九、一五五頁、一九九三、一六〇頁）。中央アジアで組織・派遣される國家の使節というものの性格の一端がよく示されている。

(70) ソグド人以外のオアシス國家の商人も當然のことながら活動はしていた。しかしながらそれは、それぞれが屬す國家の領域内部の都市とその近郊村落との往來、またせいぜいが近接するオアシス國家との近距離間の往來を果たしていたにすぎなかったと見られる。また後の時代でも、バミール以東の東トルキスタンの場合、國際的な商人は外來のそれが目立つ。眞田一九七七、眞田一九八六、一四一頁ほか。

(71) 關尾一九九八、八三―八五頁。
(72) 荒川一九九九、九六―九七頁。もちろん、商人はその交易圏内の往還を中心としても、局地的な交易圏を繋げることによって、商品そのものは遠隔地をわたっていた。

ソグド商人による「シルクロード交易品」の遠距離輸送といっても、近接したオアシスの間を往來することで成立する取引の積み重ねであった側面があり、ソグド商人＝遠隔地商人というイメージはあまりにも一面的に過ぎる。

(73) トウルファン周邊で活發に交易する商人を考えた場合、この商胡がソグド商人を意味していることは明かである。
注(8)参照。

(74) 松田一九七〇、二四七頁。『周書』卷五〇異域傳下（九一―三頁）における表現は「商胡」であるが、これもその活動地域から見ても、前注と同じくソグド商人と解するのが妥當である。

(75) 嶋崎一九七七、九八―九九頁。

(76) 一例として「高昌年次未詳（六世紀後期）―七世紀前期）迦比貪澤等錢穀備忘」（大谷 1940 背）（録）『大谷文書集成』一、九頁、〈寫〉同書一、圖版1）が挙げられる。

(77) 本文書については、既に榮新江氏によって分析されている。榮新江二〇〇七。なお最近、新出吐魯番文書の寫真と録文が公表された。榮新江・李肖・孟憲實（主編）『新獲吐魯番出土文獻』（上・下）中華書局、二〇〇八年。

princes, but it showed signs of being an effort to maintain the traditional Han system of enfeoffing princes of the royal house, and it was conducted to sustain the existence of the feudatory princes of the royal house and the principle of feudal enfeoffment born thereof.

**THE SYMBIOTIC RELATIONSHIP BETWEEN NOMADIC AND
OASIS-CENTERED STATES: AS SEEN IN THE CASE OF
THE WESTERN TÜRK AND GAO-CHANG KINGDOM
UNDER THE ROYAL HOUSE OF QU**

ARAKAWA Masaharu

This article employs the Turfan documents to address the Gao-chang kingdom under the royal house of Qu 麹氏高昌國 of Turfan and the nomadic state of the Western Türks 西突厥 who supported it and to analyze the multifarious symbiotic relationships built up between the two. As a result of this analysis, it has become clear that the core of the symbiotic relationship built up between the nomadic and oasis-centered states was the mutually beneficial relationship of the dispatch and organization of missions by various khans and various nomadic groups and their acceptance by oasis-centered states. In other words, it is thought that the leaders of the various nomadic groups in nomadic states dispatched Sogdians in the region as their agents or assigned them to accompany the missions to the oasis-centered states, and they gained the opportunity to purchase various luxury goods stored in the oases while securing food and lodging, and in addition they sold their own products or transit trade goods. In other words, the dispatch of these missions amounted to organizing a caravan for trade. Moreover, these missions in providing an opportunity for safe long-distance travel brought together many individual Sogdian traders, who originally had no relationship to the missions.

On the other hand, for the oasis-centered states the dispatch of the embassies by nomadic groups and their reception meant not simply the prevention of plundering by the nomadic states, but also these embassies brought prosperity through an increasingly thriving trade as a result of leading and protecting many Sogdian traders.

In addition, these oasis-centered states themselves dispatched missions to various locations under the order established through the nomadic states' rule. In

essence, trade across great distances in central Asia was conducted in caravans that were organized and dispatched by both nomadic and oasis-centered states and other groups, and as they developed they attracted and absorbed various individual Sogdian merchants. For the oasis-center states, the reception of missions of various nomadic groups was a vital enterprise that might determine the fate of these states.

The formation of powerful nomadic states in central Asia brought about the formation of symbiotic relationships founded on the political relationship of lord and subordinate between the khans and oasis-centered states, and under these circumstances the dispatch of missions by states and other groups became nearly regularized as the formation of a broad order that stretched across the steppes and deserts was formed. It was these circumstances that caused trade in Central Asia to thrive.

**ON THE COMPILATION OF THE *YUNSHI GUOGONG FUZHAI*
YANXINGLU (A MEMOIR OF HIS EXCELLENCY, FISCAL
ATTENDANT GUO FUZHAI): SCHOLARLY LIFE AND
SELF-CONCIOUSNESS OF OFFICIALS WHO ROSE
FROM THE RANKS OF LOWER-RANKING
CLERICAL OFFICIALS IN THE
YUAN PERIOD**

Iiyama Tomoyasu

This article is an attempt to shed light on the scholarly life and self-consciousness of officials who started their careers as low-level clerical officials and later rose to higher officialdom in the Yuan period. As the civil service examinations played a limited role under Mongol rule, a considerable number of local literati chose to serve as clerks to enter officialdom. At times, such low-level officials were praised as “scholarly clerks,” 儒吏 *ruli*, in contemporary materials and they formed the main source of officials throughout the Yuan period. However, we understand little how “scholarly” they were, especially in comparison with scholar-officials who passed the civil service examinations. Based on two memoirs of a fiscal attendant in chief named Guo Yu 郭郁 (ca 1259-?), who was also promoted